

ドクターズスタジオ

いつとはなしに「ドクターズスタジオ」と呼ばれるようになった半地下の部屋をつくらから二十五年以上たつ。

初めは明るかったチーク材の壁面も年とともに濃い褐色に変わって、これはこれだろっかねえ。今回からは、この部屋に去来した人たちのエピソードなどをお話ししてみようと思つて。

ピアノリスト田村翼の名はそれほど知られていないかもしれないが、そのブルース・フィリッ

グは本物で、僕も解説を担当した幾枚かのリーダーアルバムを持つ。七六年彼はアート・ブレイキーに認められて「ジャズメッツ・ジャズ」に起用され、その日本ツアーに参加したが、岡崎での公演のあと、一人の黒人を連れてやって来た。トランペットのビル・ハードマンだ。細かいフレーズを多用する歯切れの

良い奏法(スタックカート)に特徴をもつビルは、やがて楽器を取り出して田村のピアノをバックにバラードを吹き出した。それはステイジでの力強いプレーとは違って、温かく包み込むような美しい響きだったが、しばらくしてソファに腰をおろし、静かな口調で敬愛するクリフォード・ブ



曲「アイ・リメンバー・クリフォード」を聴かせてくれた。ビルも田村も、ジャズ史に残る際立ったジャズメンではないにしても、その時の

ビルの優しく澄んだ目と、二人の残した心安らぐ余韻は、僕の胸から決して消え去ることはないに違いない。

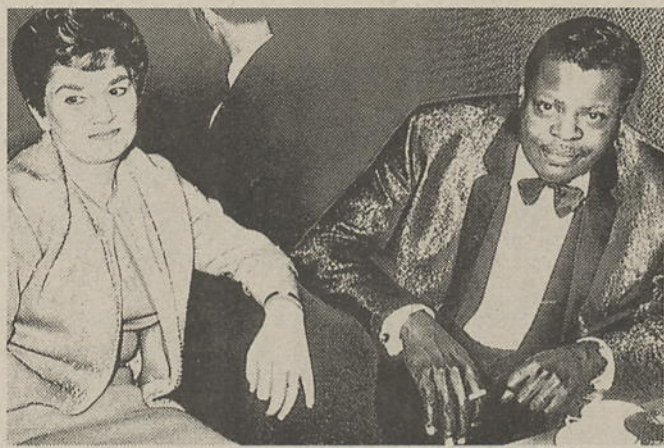
思いやりのある大男

文字通りジャズピアノ界の巨人オスカー・ピーターソンは、つい先ごろ東京・青山の「ブルーノート」に出演し、相も変わらぬダイナミック

クなプレーにその健在ぶりを示したばかりだが、一九五三年にJATP(オールスターを集めたジャズセッション)の一員として初来日して以来、二十回近くのアート・ブ

訪来家わがオスカー 披露のどをのびるし

「新幹線が岡崎の近くを通るとドクターを思い出す」となるとうれいことを言ってくれる思いやりのある男だ。彼の胸ぐらいつまでしかない僕な二十年目に初めてソロアルバムをつくつたとき、次々に意欲



名古屋を訪れたオスカー・ピーターソンと夫人=1964年、レストランコンボで

を見せなければならないか」と言い出した。そのころのオスカーは、ドイツのMPSレコードに移って、デビューしてから間もない白人の奥さんと一緒だったが、部屋に落ち着くと、「昔、ソニー・ステイットと吹き込んだLPを彼女に聴かせたいから、かけてくれないか。あれすくく気に入ってるんだが、家にはないんだよ」。僕も大好きな「S・ステット・シッツ・イン・ウィズ・O・ピーターソントリオ」というその作品は、五九年にJATPに加わってパリに行った時、居合わせたS・ステットと急ぎよぶつて本番で録音しちゃったものだという。そんなきっかけで二人の代表作ともいえる傑作が生まれてしまったんだからジャズって分からない音楽だね。それにもまして驚いたことに、以来ほとんども聴いてないというのに、ステイットの吹くフレーズを正確にそらんじていて口ずさむんだ。ナット・キング・コールはりのウ

レイキーと並ぶ最多来日記録を更新中だ。

日本びいきのオスカーとは、いつの間にかステイジのあと、日本料理とともにする仲になったが、名古屋を素通りしてしまつた時などは、

その巨体に包まれてしまふんだが、いつもほんわか温かい気分にはせられるのだ。

ある時、食事中のおしゃべり、共通の趣味が「カーとオーティオ」と分かること、

「今からドクターのスタジオかびりびりさるを得なかつたね。おつて本番で傑作